

## 長谷川欣佑さんと一緒だった頃

東京言語研究所顧問

池上嘉彦

長谷川欣佑さんと親しくなったのは、大学院の英語英文学専攻博士課程で一緒になった時期からでした。当時は「新制」の大学院が発足してまだ間もない頃、進学に際しては指導教官から「決して博士論文を書こうなどと思ってはならぬぞ」と言い渡されていましたし、本人たちも博士論文とは一生の研究成果として書かれるものと心得ていましたから、博士号を取ろうなどという思いはまったくありませんでした。その上、博士課程では所定の三年間に授業に出て取得せねばならない単位数もわずか。最初の一年でほとんどが満たされてしまいます。その後は、自分で自由に好きなままに方向を定めて勉強していればよい。その間、生活は奨学金で保証されている——本当に、勿体ない位、恵まれた時間でした。当時は、海外から新刊書を取り寄せることなど、まだ考えられない時期。ただ、研究室や中央図書館の蔵書には、古典的な専門書ならかなり見つかりました。長谷川さんとは、研究室で **H. Paul: Prinzipien der Sprachgeschichte (1890)** を一緒に読んでいましたが、長谷川さんの活発な批判的気質はその頃からすでに旺盛で、**Paul** が通時的な音変化の具体的な事例を取りあげて、それは **‘Bequemlichkeit’** (つまり、< (発音の) 快適さ >) の故であると述べているところでは、「説明にならない説明」であると強く批判していたのが記憶に残っています。

その博士課程の三年が終わりに近づいた頃、突然、長谷川さんからアメリカ言語学会が毎年夏に開く **‘Linguistic Institute’** に出てみないかと誘われました。アメリカ国内まで自費で行けば、その後二ヶ月近くの滞在費も受講料もすべて免除、という制度があるとのこと。長谷川さんは、既にその頃、**E. Nida** (宣教師であると同時に、当時の「構造言語学」(structural linguistics) の推進者の一人) と文通があつて、夏期講座の話も彼を通して知ったようです。私の方はまだ心構えも強力な後ろだてもない身でしたので、おおいに迷ったのですが、とにかく誘いに乗って応募——驚いたことに、採択の通知は二人に来ました。(あの頃は、アメリカがもっとも輝いていた時期だったのでしょう。)

1961年6月、二人は当時始まったばかりの **Anchorage** 経由のパン・アメリカン航空の飛行機で渡米、**Los Angeles** で乗り換え、会場である **Austin** のテキサス大学に二日かかりで到着しました。見ること、聞くこと、すべてが新しい経験の始まりでした。長谷川さんが出席したのは、当時まだ耳新しかった **‘Transformational Grammar’** のクラス——担当は、元気でいかにも議論好きそうな **R. Stockwell**。長谷川さんもきっと楽しんだことと思います。(因みに、私の方は **M. Joos** の **‘Semology’** と **A. Hill** の **‘Language and Literature’**——予想もしていなかったテーマと巡り合つて、嬉しい思いでした。)

コースが全部終って、帰途ではまず **Grand Canyon** に立ち寄り、最後に訪れたのは **Yosemite National Park**——広大な地域をバスで能率よく案内してくれるというので予約を入れておきました。当日の朝、集合場所では「定刻」を過ぎてもバスが来ませんし、乗客らしき人も現れません。電話をかけてみたら、バスは一時間前に出発済み、「お前たちを待っていてやったのだぞ」とのこと。どうやら、私たちはふた

りともが出発時刻を正確に聞きとれていなかったということのようで、**Linguistic Institute** に出た、アメリカの大学院でも十分やれるという自信は得られたものの、その一方で、日本の伝統的な読み書き偏重の英語教育による綻びが最後に見事に露見したというわけでした。

海外での生活体験がいかに魅力的なものであるかを知るきっかけを与えてくれた長谷川さんには深く感謝しています。